内的懐疑論の懐疑的解決

——渡邊氏の書評に応えながら——

久米　暁

本稿は、『哲学論叢』本号（第 33 号）に収められている渡邊一弘氏の書評に応えながら、拙書『ヒュームの懐疑論』のヒューム解釈に残る曖昧さを取り除くことを目的としている。書評を執筆する労をおとりいただいた渡邊氏と、書評への応答を含めた論文をこのような形で執筆する機会を与えていただいた京都大学哲学論叢刊行会にまずは感謝を申し上げたい。

渡邊氏は書評において「ヒュームの「全面的懐疑論」が私たちに何をどこまで要求してくるのか、著者の記述だけでは不明瞭であるように思われる」（渡邊, 2006, p. 153）と指摘しておられる。「全面的懐疑論」の要求内容に関しては、私は拙書において明らかにしたつもりであったが、渡邊氏の指摘を受けてもう一度考え直してみると、「全面的懐疑論」へのヒュームの対処に関する分析が曖昧であったために、当の「全面的懐疑論」解釈の理解が妨げられてしまっているのではないか、と考えるようになった。そこで本稿においては、「全面的懐疑論」の要求内容を改めて丁寧に説明することに徹することはせずに、むしろ「全面的懐疑論」に対するヒュームの対処の特質を明らかにすることによって、渡邊氏の指摘に回答することにしたい。

1．懐疑的議論・懐疑論・懐疑的解決

ヒュームが懐疑的議論を提出したこと、その懐疑的議論によって導かれる懐疑論に対しある対処を施したこと、これらのことは多くの読者の意見が一致するところであろう。しかし、一体どういうタイプの懐疑的議論であり、どういったタイプの対処であるのかについては意見がずれる。そこで、懐疑的議論・懐疑論・懐疑的解決をめぐるいくつかの解釈にコメントを与えつつ拙書の解釈を再提示するところから始めよう。

議論の整理のために、「懐疑的議論（sceptical argument）」・「懐疑論（scepticism）」・「懐疑的解決（sceptical solution）」の関係をまずは説明しておこう。「懐疑的議論」とは、懐疑論へとわれわれを導く議論のことであり、「懐疑論（scepticism）」とは「懐疑的議論」を根拠として実際に生じる「懐疑的疑い（sceptical doubt）」のことである。「懐疑的解決」とは、「懐疑論」のあるいは「懐疑的疑い」の「懐疑的解決」のことであり、一般的には、「懐疑

的議論」の正しさを認めつつ「懐疑論」あるいは「懐疑的疑い」を退けるものである。

ヒュームは「全面的懐疑論（total scepticism）」と「緩和された懐疑論（mitigated scepticism）」との二つの立場を提示しており、「緩和された懐疑論」は「全面的懐疑論」を退けたうえで提案されるヒュームの最終的立場である。したがって、ヒュームについて懐疑的議論と懐疑的解決の話をする際には、「全面的懐疑論」を導く議論と、「全面的懐疑論」に対する解決のことを論じることになる。渡邊氏の指摘が特に蓋然性に関わるので、本稿では、外界や人格あるいは道徳といったトピックは割愛して、特に因果性や蓋然性をめぐる懐疑論に関する懐疑的議論や懐疑的解決を論じることにする。

解釈 A

懐疑的議論：「事実」に関する確実的・必然的知識は成立しない。
懐　疑　論：したがって、事実に関する学は疑わしく信じるに値しない。
懐疑的解決：「事実」に関する知識は確実的・必然的でなくて構わない。不確実で蓋然的な信念であっても人間が生きそして学問をするのに充分である。

これはヒュームの知識観をいわばロック流に解釈したものである。ロックは『人間知性論』において次のように述べていた。

> ・・・蓋然性のみが得られる場合に断固として乱暴にも論証を求め確実性を要求するようなことをしなければ、われわれはわれわれの知性を正しく使用することとなるであろう。そして、このことはわれわれのすべての関心事を統御するのに充分である。われわれがすべてのことを確実に知ることができないからといってあらゆることを信じないとするのならば、われわれは翼がないからといって足を用いずじっと座りこんで死のうとする人とほとんど同じように、愚かな振る舞いをすることとなろう。（Locke, Bk. 1 Ch. 1 Sec. 5）

しかし、これは拙書が批判した解釈である。詳細は拙書の議論に譲るが、第一に、「全面的懐疑論」が確実性や必然性だけでなく蓋然性をも批判し、「わたしはすべての信念と推論を拒否するのにやぶさかでなく、いかなる意見をも他のものより確からしいとかよりありそうであると見なすことさえできない」（T 1.4.7.8; SBN 268-269）としている。第二にこれも再度強調しておきたいことであるが、たとえばヒュームが帰納推理の分析において批判したのは、確実で必然的な推理の可能性ではない。これまで何百回もそうだった場合、次

の機会にそうなる可能性が高いと言えても、必ずそうなるとは限らない、というような当たり前のことをヒュームは繰り返しただけだと考えてはならない。ヒュームが主張したのは、これまで何百回とそうであったとして、次の機会にそうである可能性がそうでない可能性よりも少しだけ高いということ、このことさえ理性は示しえないということである。言い換えれば、経験は蓋然性すら証明できないということである。ヒュームの懐疑論の的は、絶対的知識や確実性よりはむしろ蓋然性や確率あるいは信念であった。

解釈 B

懐疑的議論：すべての蓋然的信念を支える「自然の斉一性の原理」を基礎づけることができない。

懐　疑　論：したがって、何についても蓋然性を信じることはできない。

懐疑的解決：「自然の斉一性の原理」は基礎づけることができなくても真面目な疑いの対象にならない。したがって、蓋然性を信じることができる。

この解釈は、たとえば、拙書第二章で紹介したストローソンの解釈として有名である。この解釈は、ヒュームの懐疑的議論の矛先が必然性や確実性ではなく蓋然性に向いているとしたうえで、その議論が、未来のことは過去と同じような仕方で生じる可能性が生じない可能性よりも少しは高いという弱い意味での「自然の斉一性の原理」の基礎づけを否定したと理解し、他方、懐疑的解決においてヒュームは、「自然の斉一性の原理」すなわち「帰納の一般的な信憑性」は基礎づけられなくとも構わない信念であると指摘した。やはりここはストローソン自身に登場してもらおう。

> 彼ら〔ウィトゲンシュタインとヒューム〕は次のような見解を共有している。物体の存在に関する、そして、いわゆる帰納の一般的な信憑性に関するわれわれの「信念」は、基礎づけられた信念ではないが、かといって、真面目な疑いに開かれてもいない。それらの信念は、われわれの批判的・理性的能力が行使される領域を定めるかあるいは定めるのを助けるという意味で、その能力のいわば外側に存在する。これらの信念を支えようとして議論によって職業的な(professional)懐疑論的疑いに立ち向かおうと試みることは、それらの信念がわれわれの信念体系の中で実際に演じている役割を完全に誤解していることを示しているだけなのである。(Strawson, 1985, p. 19 〔　〕内は筆者による補足)

しかし、拙書はこの解釈に対し、ヒュームが「自然的信念」の原理に対して基礎づけ主義の視点から正当化を試みたという解釈は不正確であると細かく論じた。ヒュームの懐疑的議論と懐疑的解決が、基礎づけ主義からする懐疑的議論と基礎づけ主義の批判とに対応するという解釈は成り立たない。ヒュームの懐疑的議論は、そもそも基礎づけ主義に依拠せぬタイプの議論だからである。

解釈 C

懐疑的議論：因果言明や蓋然性の言明には対応する事実が欠けている。

懐　疑　論：したがって、それらを主張することはできない。

懐疑的解決：対応する事実が無くてもわれわれはそれらを主張することができる。

この解釈に基づけば、懐疑的議論は、「A は B の原因である」「明日太陽が昇る」「明日雨が降る」といった言明には対応する事実が存在せず、したがってこうした言明には真偽が成立しないと論じ、懐疑的解決は、対応する事実が存在せず真偽が成立しなくても、そうした言明を主張しても構わないと指摘する。たとえば、道徳言明に関する情動主義が示すように、対応する事実や真偽の区別が存在しない場合であっても言明は主張可能である。ヒュームの因果論における懐疑的議論と懐疑的解決をこのように解釈してみせたのが、クリプキのウィトゲンシュタイン論である(Kripke, 1982, pp. 66-68)。この点に関する明快な説明が飯田隆著『クリプキ』にある（飯田, 2004, pp. 79-87）。

この解釈にコメントを与えておくとすれば、クリプキのヒューム因果論解釈は拙書第三部におけるヒューム因果論解釈と近い。しかしクリプキの理解は多くの解釈者の理解とは異なる。というのも、クリプキがヒュームの因果論を情動主義的に理解するのに対し、多くの解釈者は、ヒュームのテキストに忠実であろうとすれば、ヒュームの因果論を内観主義的に理解せざるをえないと考えるからである。詳細は拙書の議論に譲るが（久米, 2005, pp. 95-114）、私自身は、ヒュームのテキストの細かい読解に基づけば、むしろクリプキの解釈のほうが的を射ていると考える。ところで、渡邊氏の書評は全体として極めて正確な拙書の要約となっている。しかし、拙書のヒューム因果論解釈に関して、「ヒュームが実際に示そうとしたのは、因果関係の信念が一種の情動的性格をもった精神の被決定**について**の印象であり、対象知や表象とは異なる、実践や表出であるということである」（渡邊, 2006, p. 152。傍点は筆者による強調）と要約している箇所は、私の解釈の説明としてはややミスリーディングである。というのも「因果関係の信念が・・・精神の被決定**について**の印象であり」という部分に内観主義的解釈が混在しているからである。因果関係を構成する必然

的結合はどこにも見出されえず、したがって必然的結合の印象は「・・・についての」印象ではないとする解釈が拙書の因果論解釈の核である。因果言明は、物的そして心的な事実「について」述べているのではないのである。

しかし他方で、クリプキのヒュームと私のヒュームとの相違も大きい。まず、クリプキのヒュームは、因果言明に対応する事実が内的にも外的にも見出せないというだけではなく、因果言明に対応する事実が内的にも外的にも存在しないと言っているが、私のヒュームはそのような事実を人間は見出せないと論じているだけで、そのような事実の存在を否定してはいない。さらに、より重要な差異であるが、ヒュームは、因果言明・蓋然性言明に対応する事実の欠如から生じる懐疑とは別個に、次の解釈 D で示すような懐疑的議論を展開した。

解釈 D

懐疑的議論：人間の判断能力の脆弱性を反省していくと、ついには、何についても真である可能性が高いと信じられなくなる。

懐　疑　論：したがって、何も信じることができなくなる。

懐疑的解決：何についても真である可能性が高いと信じられなくなる、と理性的には結論づけられたとしても、われわれはある事柄を信じることができる。

この解釈は、『人間本性論』（*A Treatise of Human Nature*）第一巻第三部の因果論ではなく、第一巻第四部第一節「理性に関する懐疑論について」において展開された議論に焦点をあてた解釈である。詳細は拙書の議論に譲るが（久米, 2005, pp. 120-139）、簡単に言えば、知性の信頼性に関する無限のチェックがすべての知性的判断の信頼性を完全に奪うという議論である。これこそ、拙書がヒュームの「全面的懐疑論」の本体として解釈しているものであり、実際ヒュームも、因果言明・蓋然的信念に対応する事実の欠如を説く因果論の議論ではなく、むしろこの「理性に関する懐疑論」が「全面的懐疑論」を導くと考える。しかしこの解釈 D はこのままでは曖昧である。

2．渡邊氏の指摘

ここまで準備をしてから渡邊氏の書評に目を転じよう。渡邊氏は拙書への批判をこのように述べておられる。

ヒュームの「全面的懐疑論」が私たちに何をどこまで要求してくるのか、著者の記述

だけでは不明瞭であるように思われる。たとえば第一章では、「全面的懐疑論」は信念のすべてを破棄せよと要求する、最も大きくて強い懐疑論とされる。それは日常生活とのかかわりでいえば、生きることを不可能にするものとされる（pp. 10-12）。これは別の言葉を使えば、信念をもつことすら許されないということではないのか。しかし第七章の「日常生活への復帰」の箇所、すなわち全面的懐疑論を経てどのように日常状態へと復帰しうるかを説明するくだりでは、「全面的懐疑論」が主張していることは、厳密にいえば、いかなる信念であっても真である見込みはもたないことであるとされる。それゆえその限りでの信念は自然にもつことになるというのだが（pp. 198-199）、厳密にいえばそうとれることのテキスト上の根拠が評者には不明である。むしろ信念とは活気のある観念にほかならないとするヒュームの公式見解にしたがえば、信念の蓋然性がゼロになればそこにはもはや知覚の対象たるなにものも残されていないと考えるべきではないだろうか。「理性に関する懐疑論」において、ヒュームは信念の真理性や明証性だけがゼロになるといっているのではなく、信念が完全に消滅すると宣言しているのだから。（渡邊, 2006, p. 153）

渡邊氏の批判は残念ながらこのように非常に短いため、氏の本意がどこにあるか一目では分かりにくい。しかしながら、氏の批判の骨子を私は次のように理解した。

渡邊氏によれば、第一に、「信念の蓋然性がゼロになること」と「信念の真理性や明証性がゼロになること」とを区別して理解する必要がある。理由はこうだ。信じるとは一体どういうことか。ヒュームによれば、信じるとは蓋然性を信じることに他ならない。というのも、ヒュームによれば、信じるとは強く生き生きと思考することに他ならず、その勢いや生気こそが蓋然性に他ならないのだから。だとすれば、蓋然性を信じることなしに何かを信じることは不可能である。とすれば、もしヒュームが懐疑的解決によって、真である確率がより高いと思わずに何かを信じることが可能だと指摘したとするならば、真なる確率と蓋然性とは別ものでなければならない。信じることと蓋然性を信じることとが一体なのだから。けれども第二に、「理性に関する懐疑論」の懐疑的議論は強いタイプの議論であって、真である確率がより高いと信じることができないことだけではなく、そもそも何かを信じることができないことを示すものである。とすれば、ヒュームの懐疑的解決が、たとえ真である確率がより高いと思わずに何かを信じることが可能であると指摘したとしても、この「理性に関する懐疑論」すなわち「全面的懐疑論」は解決されずに残ってしまうであろう。

渡邊氏の指摘のうち、拙書は次の二点に同意している。第一に、ヒュームにとって、何

かを信じるとは蓋然性を信じるということである点。第二に、ヒュームの「全面的懐疑論」は、何かを信じることすなわち蓋然性を信じることができなくなることを示す議論だという点。しかし同時に、拙書は、第三に、「信念の蓋然性がゼロになること」と「信念の真理性や明証性がゼロになること」とが同じであると理解し、その上でヒュームの懐疑的解決を解釈している。そこで、続く第三章では、第三点すなわち「信念の蓋然性がゼロになること」と「信念の真理性や明証性がゼロになること」とが同じであるとヒュームが考えていた点を確認し、その上で第四章において、「全面的懐疑論」に対する懐疑的解決の内実を明らかにしていこう。

しかしその前に些細なことをひとつだけ述べておきたい。渡邊氏は、「信念の蓋然性がゼロになればそこにはもはや知覚の対象たるなにものも残されていないと考えるべきではないだろうか」と指摘されておられる。しかし、「信念の破棄」や「信念の消滅」あるいは「信念をもつことすら許されない」という状態や「信念の蓋然性がゼロになる」という状態が、イコール「知覚の対象たるなにものも残されていない」という状態だとは言えないと私は考える。渡邊氏の言う「知覚の対象たるなにものも残されていない」状態がどういった状態かは明瞭には分かりかねるが、ヒュームの「知覚」の用法に従えば、知覚が無い状態とはつまり意識にのぼるものが無い状態のことである。ヒュームの「全面的懐疑論」はそこまでは要求していない。信念が全面的に破棄されたとしても単たる思考は残っていても構わない。具体的に言えば、信念が全面的に消滅したとしても、「明日太陽が昇る」「明日太陽が昇らない」の二つの思考自体は残っていて構わない。どちらがより蓋然的であるか、つまりそれらを思考する際の勢いと生気の差が全く無くなってしまうということが「信念の消滅」である。したがって、ヒュームの「全面的懐疑論」が「知覚」の全面的消滅を要求しているとは言えないであろう。

しかし、渡邊氏が信念の消滅は知覚の消滅に至ると敢えて述べられたその気持ちは分からないでもない。つまり、渡邊氏は、「理性に関する懐疑論」は、私の解釈するヒュームの懐疑的解決では決して解決できないほどに強い要求をわれわれに突きつけていることを強調しようとしているのであろう。ヒュームの懐疑的議論は、真である確率がより高いと思えないということだけでなく、そもそも何かを信じることができないことを示していたのであり、ヒュームの懐疑的解決が真理と信念とを分離したとしても、なお解決されずに残るであろうと。

3．信念・蓋然性・真理

渡邊氏が考えるように、ヒュームは、何かを信じるとは蓋然性を信じるということであ

ると考え、また、ヒュームの「全面的懐疑論」は、何かを信じることすなわち蓋然性を信じることができなくなることを示す議論であった。けれどもヒュームは同時に、「信念の蓋然性がゼロになること」と「信念の真理性や明証性がゼロになること」とを同じことと理解していた。この点を確認しておこう。

まず、拙書が「信念の蓋然性がゼロになること」と「信念の真理性や明証性がゼロになること」とを同じことと理解し、ヒュームの「全面的懐疑論」が「信念の蓋然性がゼロになる」すなわち「信念の真理性や明証性がゼロになる」ことを要求していると解釈した点、言い換えると、ヒュームの「全面的懐疑論」が要求していることは、「どの言明であっても蓋然性があるとは見なせなくなること」すなわち「どの言明であってもいかなる程度の真理性も明証性もあるとは見なせなくなること」と解釈した点を確認しておこう。拙書第一章第一節に次のようにある。

> さて、ヒュームの「全面的懐疑論」の強さはどの程度だろうか。程度は最も強く、信念を捨てよと要求しているというのが答えである。「理性に関する懐疑論について」の節においてヒュームは、「全面的懐疑論」が、信念の確実性ばかりか、最低程度の明証性や蓋然性をも否定し、したがって、信念・判断そのものを否定すると述べている。・・・（中略）・・・すなわち、確実性だけではなく、最も低い明証性さえ残らず、したがって、蓋然性も信頼性も全く無いという結論をヒュームの「全面的懐疑論」は導くのである。（久米, 2005, pp. 10-11）

ここで私が、信念の「蓋然性」と「明証性」と「信頼性」をすべて同じように扱い、ヒュームの「全面的懐疑論」が、「何も信じられなくなる」こと、つまり「信念の蓋然性がゼロになる」こと、すなわち「信念の明証性がゼロになる」ことを要求したと解釈している。また、拙書第四章においても、「全面的懐疑論」の本体である「理性に関する懐疑論」の特徴を列挙して、「第二に、疑いの強さから見れば、これは蓋然的な信念さえ批判し判断停止を要求する強い懐疑論である」（久米, 2005, p. 122）と述べている。「理性に関する懐疑論」が、蓋然性がゼロになって何も信じられなくなることを示した議論だと解釈していた点は明らかである。

次に、ヒューム自身がこのように、信念や蓋然性そして明証性を結びつけて考えていたという点も確認しておこう。「理性に関する懐疑論」は、蓋然性の消滅を要求する議論であることは明らかである。たとえば、「こうして、われわれが元の蓋然性をどれほど大きなものであったと仮定しようとも・・・最後には、元の蓋然性がまったく残っていないという

事態に至るのである」（T 1.4.1.6; SBN 182）と言われる。そしてこの事態をヒュームは次のように表現する。「論理学の全規則は・・・最後には信念と明証性の完全な消滅を要求する」(T 1.4.1.6; SBN 183)。「知性は、単独で、それの最も一般的な諸原理に従って働くときには、自らを完全に覆し、哲学におけるものであれ、日常生活におけるものであれ、いかなる命題にも、もっとも低い程度の明証性さえ、残さないからである」(T 1.4.7.7; SBN 267-68)。「信念は必ず自らを滅ぼし、全ての場合に、判断の完全な中止に終わるしかない」（T 1.4.1.8; SBN 184）。「わたしはすべての信念と推論を拒否するのにやぶさかでなく、いかなる意見をも、他のものより確からしいとかよりありそうであると見なすことさえできない」（T 1.4.7.8; SBN 268-269）。以上のテキストを見れば、ヒュームが、「信念」、信念の「蓋然性」、信念の「明証性」を同じものとして使っていることが分かる。

さらにまた、ヒュームはこの懐疑的議論が「われわれの判断はいかなる事柄においても真理と虚偽のいかなる基準ももっていないと主張する」(T 1.4.1.7; SBN 183)とさえ述べて、蓋然性の否定が真理と虚偽の基準の否定を意味すると考えている。なぜヒュームはこのように蓋然性と真理性とを結びつけて考えるのか。まず、「蓋然性」とは「真である可能性」あるいは「真である確率」のことである。具体的に言えば、「明日雨が降る」という命題の蓋然性とは、「明日雨が降る」という命題が真である可能性、あるいは真である確率のことである。さて、もし「明日雨が降る」という命題の蓋然性が「明日雨が降らない」という命題の蓋然性よりも少しでも高いのであれば、われわれは真理と虚偽に関してある最低限の基準を手にしていることになる。つまり、「明日雨が降る」という命題のほうが「明日雨が降らない」という命題よりも、より真である可能性が高いというように。しかし、もしいかなる命題についてもわれわれがその蓋然性さえも見積もることができないのであれば、われわれは「いかなる事柄においても真理と虚偽のいかなる基準ももっていない」ということになる。したがって、すべての命題に関して蓋然性を信じることができないという主張は、真理と虚偽の一切の基準の否定を意味するのである。

渡邊氏は、「「全面的懐疑論」が主張していることは、厳密にいえば、いかなる信念であっても真である見込みはもたないことであるとされる。・・・厳密にいえばそうとれることのテキスト上の根拠が評者には不明である」（渡邊, 2006, p. 153）と指摘しておられる。しかし、「真である見込み」とは「真である可能性」「真である確率」すなわち「蓋然性」のことである。ヒュームの「全面的懐疑論」が、「蓋然性」すなわち「真である見込み」をいかなる言明に関しても信じることができなくなることを示した議論であることは、テキスト上、明白であると思われる。

以上によって、ヒュームの「全面的懐疑論」が、「どの言明であっても蓋然性があるとは

見なせなくなること」すなわち「どの言明であってもいかなる程度の真理性も明証性もあるとは見なせなくなること」を示した議論であることが確認される。

4. 「理性に関する懐疑論」と懐疑的解決

「真である見込み」「真である可能性」と「蓋然性」との同義性を確認した上で、渡邊氏が問題にされた拙書「第七章の「日常生活への復帰」の箇所、すなわち全面的懐疑論を経てどのように日常状態へと復帰しうるかを説明するくだり」（渡邊, 2006, p. 153）を見てみることにしよう。

> こうして「日常生活において、自分が他の人々と同様に、生き、話し、行為するように、絶対的かつ必然的に決定されているのを見出す」(T 1.4.7.10; SBN 269)のであるが、しかし、何かを信じることなしに生きることはできないのだから、信念の全面的破棄を要求する「全面的懐疑論」の立場から見れば、生きることだけで「全面的懐疑論」の主張に反しているということになりそうである。けれども、「全面的懐疑論」が主張していることは、厳密に言えば、いかなる信念であっても真である見込みはもたないということである。とすれば、何かを信じるということが、その信念が真である可能性があるという考えを含んでいなければ、「全面的懐疑論」の主張に特に抵触しないことになる。（久米, 2005, p. 199）

ここでは、前章で解釈 D として整理した「懐疑的議論」「懐疑論」「懐疑的解決」の関係がひととおり説明されている。懐疑的議論は、「真である見込み」や「真である可能性」すなわち「蓋然性」をわれわれは何についても信じることができない、すなわち何も信じることができない。行為には信念が必要であるから、何も信じることができないならば行為することもできなくなる。懐疑的解決は次のように言う。何についても蓋然性が高いと信じることができないという結論にもかかわらず、われわれは何かを信じてよい。なぜなら信じるということは理性的議論によって左右される必要はないから。次のテキストがこの解釈を裏付けてくれる。

> こうして、この想像上の学派の議論〔懐疑的議論〕をこれほど注意深く提示した際の私の意図は・・・信念はわれわれの自然本性の思考的部分の作用というよりはむしろ情動的部分の作用であるというのがより正しいとする、私の仮説の真実性を、読者に分かってもらうためであった。(T 1.4.1.8; SBN 183 〔 〕内は筆者による補足)

さて、曖昧なままであった拙書の解釈を明晰にする段となった。拙書がとった解釈 D はあたかも D1 のように見えてしまうかもしれない。

D1

懐疑的議論：何についても真である可能性が高いと信じることはできない。
懐　疑　論：したがって、何も信じることはできない。
懐疑的解決：真である可能性が高いと信じることなしに何かを信じるということが可能である。

ヒュームにとっては、信じることと真である確率が高いと信じることは同じである。したがって、信じることと真である確率が高いと信じることとの分離をヒュームが提案していると見る D1 は不可能な解釈である。また、ヒュームにとっては、信じることと蓋然性を信じることは同じであるから、信じることと蓋然性を信じることとの分離を提案していると見る次の D2 もありえない解釈である。

D2

懐疑的議論：何についても蓋然性を信じることはできない。
懐　疑　論：したがって、何も信じることはできない。
懐疑的解決： 蓋然性を信じることなしに何かを信じるということが可能である。

拙書のとった解釈 D は D1 や D2 のことではなく D3 のことである。

D3

懐疑的議論：何についても真である可能性が高いと信じることはできない。
＝何についても蓋然性を信じることはできない。
＝何も信じることができない。
懐　疑　論：したがって、何も信じることができない。
懐疑的解決：何も信じることはできないという理性的な考えにもかかわらず、われわれは真である可能性や蓋然性を信じることができる。

懐疑的解決によってヒュームが指摘している内容は、われわれは蓋然性を信じることなく

信じることができる、あるいは、われわれは真である確率がより高いと信じることなしに信じることができる、というものではない。信じること、蓋然性を信じること、真である可能性が高いと信じること、これらすべてを同一と理解したヒュームにとっては、それは無理な提案である。蓋然性の存否や真である確率の高低についての理性的な査定に合わせる仕方で蓋然性や真の確率を信じる必要はない、というのがヒュームの懐疑的解決の中身である。

拙書は、「信念を真理から切り離す」あるいは「探究や学問を真理から切り離す」という表現を使ってヒュームの懐疑的解決を説明している。拙書第七章や結においてこれに類する表現が頻出する。しかしこれらは曖昧でミスリーディングな表現である。「真理と信念を切り離す」の意味は、「真である確率がより高いと信じることなしに何かを信じる」ということではなく、「真である確率の高低に関する理性的な査定には基づかずに、真である確率が高いと信じる」ということである。「何かを信じるということが、その信念が真である可能性があるという考えを含んでいなければ」(久米, 2005, p. 199)、信じることは容認される、ということの正確な意味は、「真である可能性がより高いという信念を含まずに何かを信じるのであれば」その信念は容認されるということではなく、「真である可能性の存否に関する理性的な査定に基づかずに真の可能性を信じるのであれば」その信念は容認されるということである。「真理と信念を切り離す」ということの意味は、すなわち、真である可能性の理性的査定に合わせて何かを信じることを否定する、ということである。

同様に、「真理から探究や学問を切り離す」ということの意味は、真理とは一切無関係に探究や学問を行うということではない。探究や学問は真である可能性がより高いものを見出すことはできないという理性的な考えがあるにもかかわらず、われわれは探究や学問を自然に遂行しその結果を真である可能性がより高いと自然に信じてよいという意味である。人間は、ある命題に真理の可能性があるという理性的な思考に基づいてその命題を信じるというルートを辿ることはできない。真理の可能性に関する理性的査定と無関係に自然に何かを信じてしまうこと、そのことこそが真理の可能性がより高いと信じていることに他ならないとヒュームは言いたいのである。

次のように言ってもよい。情動主義は一般に情動を真偽と対比し、ある言明が情動の表出であり、それゆえ真偽の可能性がないと主張する。クリプキがとった解釈 C は、ヒュームがそのタイプの情動主義を広く因果言明や蓋然性言明にも適用したと理解する。しかし、ヒュームの情動主義はより徹底しており、真偽さえも情動化することによって、真偽を情動に結びつける。真理と信念を分離するのではなく、信じるべきでないとどれほど頭で分かっていても体で信じてしまうこと、そのことがまさに、真であると信じることである。

真理と探求とを分離するのではなく、探求しても真理は得られないとどれほど頭で分かっていても体が動いて推理を行いある事柄を信じてしまうこと、そのことがまさに、真理を探究することだとヒュームは考えた。このことを私は拙書の「結論」において次のように述べた。「そうした自然な知性の傾向性が生み出す結果が逆に真理と呼ばれるのである。真理が知性作用の自然性を規定するのではなく、知性の自然性が真理を規定するのである」（久米, 2005, p. 228）。

5．内的懐疑論と懐疑的解決

ところで、拙書において私は、外的懐疑論と内的懐疑論とを区別して、ヒュームの懐疑論を内的懐疑論であると特徴づけた。外的懐疑論とは、日常性に外的な視点から為される懐疑論であり、たとえば基礎づけ主義に基づく懐疑論がその典型である。それに対してヒュームは、日常性の内側から導出される、言い直せば、日常的に信じられている事柄のみを使って、哲学者が特有に依拠する前提を使わずに導出される懐疑論を提出しようとしていた、と解釈した。

けれども、ヒュームの懐疑論は内的懐疑論ではなくやはり外的懐疑論に過ぎないという批判もありうるだろう。ヒュームが「全面的懐疑論」に懐疑的解決を施しているのなら、「全面的懐疑論」は外的懐疑論でなければならないように思われるからである。この批判をより詳しく考えてみよう。懐疑論に対する懐疑的解決は、懐疑的議論から懐疑論が導かれる際に使われる前提が、哲学者が日常性を越えて依拠してしまっている前提であることを指摘する。つまり、懐疑論が導かれてしまうと考えるのは、日常から背離したある突飛な前提を採用する哲学者だけであって、たとえ懐疑的議論が正しいとしてもその前提をとらなければ懐疑論に陥らずに済むことを示すのである。具体的に言えば、解釈 A の懐疑的解決は、「確実性が得られないのなら信じるに値しない」という前提を、解釈 B の懐疑的解決は「基礎づけることができないなら疑わしい」という前提を、解釈 C の懐疑的解決は「対応する事実がないなら主張不可能」という前提を、それぞれ日常性に外的な前提であると指摘することによって、「確実性が得られない」「基礎づけることができない」「対応する事実がない」とする懐疑的議論の正しさを認めつつ、懐疑論を否定する。とするならば、懐疑論に対する懐疑的解決が可能であるということは、元の懐疑的議論が日常性に外的な前提に依拠する議論、拙書の言い方を使うならば、外的な懐疑論であることを同時に示す。とすれば、懐疑的解決が為される以上、ヒュームの懐疑論は外的懐疑論であるということになるだろう。懐疑的解決が可能ならば、懐疑論が日常性には含まれていない日常性の外にある前提に依拠していたことになるのだから。

たしかにD1やD2といった解釈をとれば、懐疑的解決は、懐疑的議論から懐疑論を導くために日常性に外的な前提を用いると指摘していることになる。すなわち「日常的に何かを信じることには真理の確率や蓋然性を信じることが含まれている」という前提がそれにあたる。これが日常性には含まれない、日常性に外的な前提であると指摘することによって、真理の確率や蓋然性を信じることができないという懐疑的議論を正しいと認めると同時に、真理の確率や蓋然性を信じることなしに何かを信じることは可能なのだから、懐疑論は出てこない、とヒュームは述べていることになる。しかしそうだとすれば、ヒュームの「全面的懐疑論」は、「日常的に何かを信じることには真理の確率や蓋然性を信じることが含まれている」という外的前提を用いた外的懐疑論ということになってしまうだろう。

しかし、D3に基づくヒュームの懐疑的解決は、D1・D2を含めた他の懐疑的解決とは様子が異なる。他の懐疑的解決は、懐疑的議論から懐疑論が導かれるルートに外的な前提が使用されていることを指摘する。それに対しD3の懐疑的解決は懐疑論へのルートに問題を指摘するのではない。実際D3においては、懐疑的議論が、渡邊氏が指摘するように強力であり、「いかなることも信じることができない」という「懐疑論」と一体の主張を既に直接導出している。他の懐疑的解決が問題にする、懐疑的議論から懐疑論への隙間が存在しない。D3に基づく懐疑的解決は、懐疑論へのルートさえも正しいと認めた上で懐疑論を解決する試みである。懐疑論そのものまでも議論としては正しいと受け入れた上で、そうした正しい理性的議論の帰結に合わせて信念を形成する必要が無いと指摘する解決である。

まさにこの懐疑的解決の特殊性こそが、ヒュームの「全面的懐疑論」が内的懐疑論であることを示す。ヒュームの「全面的懐疑論」は日常性に外的な前提を用いない内的な懐疑論である。それゆえに、日常性の外にある前提を用いていたと指摘することができない。実際、「日常的に何かを信じることには、真理の確率や蓋然性を信じることが含まれている」は外的な前提ではない。ヒュームは、日常性のレヴェルにおいて、何かを信じることは真理の確率や蓋然性を信じることに他ならないと考えていた。したがって、その前提は決して外的なものとして日常性の外へとは排除されえない。内的懐疑論への懐疑的解決は、懐疑的議論から懐疑論へのルートを遮断するのではなく、懐疑論という理性的議論の帰結に合わせてわれわれが信念や探求を行うことを否定する、という特殊な方法に基づかねばならないのである。

6．おわりに

このようにしてヒュームの「全面的懐疑論」に対する懐疑的解決の特殊性が明らかになった。しかし、この懐疑的解決に関して、拙書『ヒュームの懐疑論』は「信念や探求を真

理から切り離す」というミスリーディングな表現を使い、しかもその特殊性を述べることを怠っていた。そのために、ヒュームの解決が、真理との関係を日常的信念や日常的探求に不要な外的な要素として排除する方法をとったという誤解を読者に与えた可能性がある。しかしヒュームの「全面的懐疑論」は外的な要素を用いない内的懐疑論である。したがって、その解決において、日常性に外的な前提を指摘するというこのような通常の方法をとることは決して許されないのである。

文献

飯田隆 (2004).『クリプキ ― ことばは意味をもてるか』, 日本放送協会出版
久米暁 (2005).『ヒュームの懐疑論』, 岩波書店
渡邊一弘 (2006).「書評『ヒュームの懐疑論』」, 『哲学論叢』第 33 号, 京都大学哲学論叢刊行会, 150-153.
Hume, D. (1739-40). *A Treatise of Human Nature*（引用参照については拙書『ヒュームの懐疑論』と合わせるために、T と略記し、ノートン版の巻・部・節・段落の数字と、セルビー・ビック版（SBN と略記）のページ数を記す（例: T 1.4.7.10; SBN 269）。ノートン版とは、*A Treatise of Human Nature*, edited by D. F. Norton and M. J. Norton, Oxford: Oxford University Press, 2000 を指し、セルビー・ビック版とは、*A Treatise of Human Nature*, edited by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Second Edition, Oxford: Oxford University Press, 1978 を指す。）
Kripke, S. A. (1982). *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Oxford: Basil Blackwell.
Locke, J. (1689). *An Essay concerning Human Understanding*, edited by P. H. Nidditch, Oxford: Oxford University Press, 1975.
Strawson, P. F. (1985). *Skepticism and Naturalism: Some Varieties*, New York: Columbia University Press.

〔関西学院大学専任講師〕